



この本をお読みになった方へお願い

あなたはこの本を読まれて、どんな感銘を受けられたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけましたら、ありがたく存じます。なお、このつぎには、どんな本を読みたいとお考えですか。

この本には、一字でも誤植がないようにと願っておりますので、もしも、お気づきの点がありましたら、あわせてお教えてください。お手紙にはご職業や年齢なども書きそえてくださいませんか。

東京都文京区音羽町三ノ一九

光文社

神吉晴夫

長編推理小説 701号 法廷 太陽信用組合事件

昭和38年11月30日 初版発行

検印廃止 ￥310

著者 さ 佐 賀 潜
東京都中央区銀座6-4
交詢ビル502号

発行者 神 吉 晴 夫

印刷者 堀 内 文 治 郎
東京都千代田区神田三崎町2
堀内印刷

発行所 東京都文京区音羽町3 株式会社 光 文 社
振替東京115347

落丁本・乱丁本は本社でお取替いたします。(関川製本)

表紙の模様・意匠登録 116613

© Sen Saga 1963

701号^{ごうほうてい}法廷

太陽信用組合事件

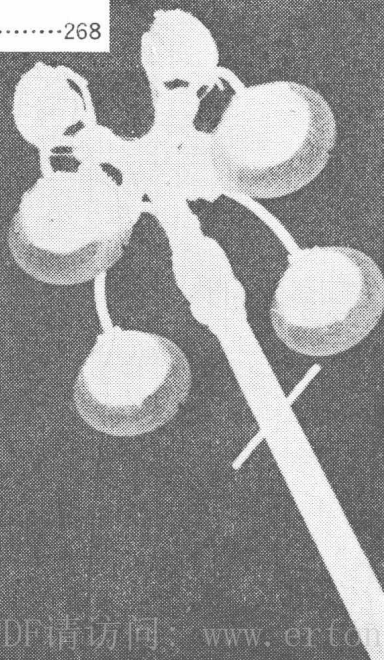
佐^さ賀^が 潜^{せん}



カッパ。ノベルス

目 次

第一章	ある信用組合	5
第二章	扼殺死体 やくさつ	34
第三章	701号法廷	63
第四章	虚実の証言 きょじつ	91
第五章	鑑定の限界	121
第六章	有罪か無罪か	150
第七章	二億五千万円	179
第八章	裁判官の合議	208
第九章	弁護士への道	238
第十章	法廷の圏外	268



写真

島内英佑

イラスト

浅田和男
佐々木格

第一章 ある信用組合

(1)

つむじ風が、砂塵を巻いていた。

台風二十一号が、伊勢湾に上陸し、暴威をふるいだすと、その余波をうけて、関東地区も、朝から十五メートルの風が吹きだし、街路樹をたわませ、電線を鳴らし、ネオンやサインボードをきしませていた。

ビルの谷間に吹きこんだ風は、T字路で、進路をはばまれると、反転し、つむじを巻いて、路上の砂塵を吹きあげ、紙屑や落葉を、舞いあがらせた。

T字路の角に、三階建の古びた灰色のビルが

あり、ドアの上のタイル張りに、「太陽信用組合」と、金色の六字がはめこんである。

その建物の前に、二、三百人の群集が、大声でわめき、手を振りあげ、氣勢をあげていた。向こう鉢巻きの若者もいれば、エプロン掛けの主婦、腰の曲がった老人もいる。

どの顔も、緊張と怒りをむきだしに、建物へ向かい、罵声をあびせかける。

「金を返せ」

「ドロボウ！」

「預金は、おれたちの汗の結晶なんだぞ」

「きさまたちは、詐欺か」

「あの金は、子供の入学のお金なんです」

「くやしい！」

「よくも、おれたちを、だましやがったな」

「警察は、なにをしてやがんだ」

「八万五千円の貯金は、うちの亭主の三十年つ

とめた、退職金なんです」

中には、泣いている婦人もいた。

風が唸りを生じ、群集にぶつかり、帽子をとばし、かぶった風呂敷を吹きとばし、髪を逆立て、着物の裾を吹きあげた。

ダイヤガラスのドアに、「まことにきょうしゆくですが、東京都経済局の検査が済むまで、向こう一カ月間、休業させていただきます」と、書いた紙片がはつてある。

若い男が、ドアを叩いた。

数人が、体をおつけていった。

ガラスが割れ、ドアが観音びらきに開いた。人々は、いっせいに中へなだれこんだ。カウンターをめぐらした店内に、人の姿はなく、「預金」とか、「貸付」、「払出」と書かれた、三角錐がならび、ステンレスのテーブルの上も、きれいにかたづけられ、漆喰壁にかかった大時計が、カチカチと秒をきざんでいた。

「だれも、いねえのか」

「責任者たちは、ズラかったんか」

「預金者が、銭をおろしにきたんだ」

「日高理事長、出てこい」

「おれたちの金を、どうしてくれるんだ」

人々は、口々にわめき、足を踏みならし、三角錐を投げつけた。

群集の約三分の二は女で、工員かサラリーマン、あるいは商店の細君という、身なりをしていた。男は、職人か、商人という感じである。

奥まったドアが開いた。

煉瓦色のセパレーツを着た、美しい女が出てきた。カールした黒髪が、ふさふさと両頬を覆い、太い黒縁のロイド眼鏡が、皮膚の白さを浮きたたせ、中高の顔に、真紅なルージュが、白布に紅をおとしたように、あざやかだった。

女は、テーブルの間を縫って、カウンターへ近づいた。

「きさまは、なんだ」

太陽信用組合を手入れ

約二億五千万円の横領で

警視庁防犯課は一日朝、東京都中央区青橋二五太陽信用組合、日清万成理事長を「二」をはじめ、江東区豊田区葛飾区文京区新宿区内の各支店、中央区日本橋通り三丁目男体ゴルフクラブ本社、栃木県日光市日光線鉄道建設事務所、同県塩谷郡田沼町在東電電光開光株式会社、および高取山スキーライン株式会社、その他太陽信用組合事務理事等屋敷方など数カ所を捜査し、横領の疑いで家宅捜索、証拠書類を押収した。

同課の調べでは、太陽信用組合の資金は約三万人、預金総額二

十億円だが、監査官である都経済局に提出された経理関係書類に偽造あるものと推定している。

九月初め、同組合が全国信用組合連合会に五千万円の融資を申込んだところ、都経済局が事業内容に不審を持ち検査したところ、総額二億五千万円の資金が行方不明であることが発見され、その使途があいまいであったため、同局はさる九月十七日同組合に業務停止命令を出した。

主婦をしぼり現金など奪う

吉祥寺に肖強盗

一日午後九時ごろ、東京都武蔵野市吉祥寺北町一ノ二六〇一八会社員役加納三三（三三）と三三の男が玄關からあがり込み、三三さんを後手しにばって押入れに隠し込み、現金二千円と三万円の現金通

箱根神社社務所焼く

【小田原】一日夜九時すぎ、神奈川県足柄下郡箱根町大箱根大芝八六箱根神社（湯山好孝氏）社務所のふろ場から出火、本館三家の同社務所一むら四二九平方メートルが全焼、十時すぎ消えた。小田原署の調べでは、油バーナーが原因とみられる。

ひ裂

子生達か 白か房が郎一ヒ近 一 でがっ池

「女なんか、用はねえんだ」
「私たちは、預金の払い戻しにきたんです」
「あんたで、話がわかるんか」
女は、口辺に微笑をうかべ、左右に会釈する

「組合の主脳部は、ただいま、都の係員と折渉中でございます。不本意ながら、みなさまとお会いすることができません。私は、企画室長をいたしております日高です。今回の検査の対策につきまして、みなさまに、ご迷惑をかけないため、万全の処置を、研究中でございますからきょうのところはお引きとりください」と

と言った。年のころは、三十二、三で、落着いた気品の中に、女らしいやわらかさがある。丸みのある声に、甘い情感さえ滲んでいた。
「おい、そんな甘い言葉にや、だまされねえぞ。けさの新聞を見ろ。東京都の役人が、きのう、踏みこんだら、預金は、たった三千円しかなか

ったと書いてあるんだ」

「二十億の錢は、どこへ消えちまったんだ」

鉢巻きをした、五十男がどなるように言った。

「三千円の残金で、私たちの預金に、払えるわけはないでしょ」

「いつ、払ってくれるんだ」

「おい、理事長に会わせろ」

三人の若者が、カウンターをおどりこえ、女を取りかこんだ。

「新聞の報道が、まちがっているのです。太陽信用組合には、数十億の財産があります。大部分は、不動産です。男体ゴルフクラブの敷地だけでも、すでに、十万坪は、名義を変更しましたし、残り三十万坪についても、手付金を打っておりま

す。名義変更済みの十万坪を、かりに、坪二万円としても、二十億円となります。その他那須と

日光間の、私鉄建設用地、奥鬼怒開発の敷地、スキー場の建設用地の買収など、当組合は、十数カ所で、観光事業の建設を計画中であります。

みなさん、都内に、信用組合は、数多くありますが、どこの組合でも、これほど有望な事業を、いたしているところはありません。みな、組合員に、お金を貸しつけ、その利息収入で、経営をまかなっている現状です。

したがって、他の組合の資産は、組合員の出資金や預金以外、なにもありませんのです。こういう組合でしたら、なるほど、預金者がいっせいに、払い戻しを請求すれば、たちまち、資金難におちいるでしょうが、私どもの組合は、みなさまの預金に、土地となつて、残っているのです。

土地というものは、絶対に、値下がりはしません。太陽信用組合の強さは、ここにあるの

でございます」

女は、女学校の先生が、生徒に講義するよう
な口調で、しゃべりまくった。

「なにをいってやがんだ」

「そんなうめえ口車にや、のせられねえぞ」

「土壇場で、女を出しやがって、ごまかそうっ
てんだな」

「女じゃダメだ。日高万蔵を出せ」

「あたしゃ、今すぐ、お金がほしいんだよ」

「私の預金は、二万円です。半分でもすぐ、も
らいたいです」

二十五、六歳の工員ふうの女が泣き顔で声を
絞った。

三、四人の男たちが、女を取りかこみ、肩や
腕を掴んだ。

「みなさまの、ご立腹、ごもつとぞんじま
す。が、みなさん、信用組合は、東京都の監督
を受けておるのでございます。毎年、何回も検

査を受け、たとえ一円のまちがいがあっても、
検査は通りませんのです。

ですから、都の経済局といたしましても、う
ちの組合が、有望安全な事業に、融資している
ことも、じゅうぶん承知しております。また、
全国信用組合連合会という、大きな組織がござ
いまして、いざというときには、みなさまの出
資金や、預金を、責任をもって、払ってくださ
るしくみにもなっております。

もし、当組合が、みなさまに、お支払いをし
なかつたら、それこそ、全国にたくさんある、
信用組合の信用は、ゼロとなってしまうので、
連合会が、後ろから、支えているわけなの
ですの」

男たちは、女から手を離れた。

「いま言ったこと、まちがいないんだな」
カウンターの外から、背の高い中年の男が、
どなるように声をかけた。

「ぜったいに……」

「あんたの名前は、なんていうのか」

「日高多津と申します」

「すると、理事長日高万蔵の女房か」

「さようでございます。理事長の側近にいて、組合の仕事を見ておりますから、なにもかも、わかっておりますの」

「信用組合が、ゴルフ場を経営したり、観光事業を、やったりしていいのか」

「株式会社男体ゴルフは、都内に本社があり、太陽信用組合員ですから、貸し出しをしても、さしつかえありませんので」

「土地の名義を、変えたといったが、だれの名前にしたんだ」

「株式会社男体ゴルフの名義にして、組合が、担保で押さえておりますから、心配は、ございません」

「われわれの預金は、いつ払い戻しをしてくれ

るんだ」

「九月十七日から、十月十六日まで、一カ月休業しますから、営業再開後、十五日以内に、かならず、お支払いします」

「まちがいないんだな」

「お約束は、かならず、まもります」

「じゃあ、一筆書いてくれ。十月三十一日までに、組合員の預金は、全額払いもどすとな」

「私が、一筆書くことが、なんになるのでしょうか。信用組合は、東京都の監督を受け、厘毛の不正も許されないことは、ただいま、申しあげたとおります。組合の財産は、すべて、組合員のものでですから、私が、一筆書く書かないに、かわりなく、みなさんの預金が、なくなるわけはございません。都庁の監査が済み、その結果が、公表されれば、意外に多い財産について、みなさまは、驚かれるのに、ちがひありません」

「そんなに、信用ある組合なら、なぜ、役人の検査をうけたんだ」

「太陽信用組合が、発足して、日も浅いののに、日の出の勢いで、伸びてきましたので、同業者のねたみを買ひ、デタラメな投書をされたからですの。」

それに、日高理事長が計画している、観光事業には、あまりにも、多くの敵があります。現に、奥鬼怒開発につき、北関東鉄道、大日本観光株式会社などと競り合ひをしております。ですから、太陽信用組合の失脚をもくろみ、ありもしない噂を、ふりまかれていますのです」

多津はしじゅう、表情をやわらげ、男たちの鋭い言葉を、かわしていた。人々は、興奮を静め、多津の説明に、耳を傾けだした。

(2)

預金者たちが、帰りはじめた。

「おい。十月いっぱい、払わんときは、詐欺で、後ろへ手がまわるぜ。この場合は、あんたの言うことを信用して、いったんは帰るが、だましたら、承知しねえぞ」

「きつとだぜ」

「おねがいします」

そんな言葉を残して、結局、帰ってしまった。多津は、ガラスの割れたドアを閉めると、奥まった理事長室へ戻った。

理事長の日高万蔵が、椅子から立ちあがると、多津の手を取って、ソファへみちびいた。

「やあ、ご苦労さん。あんな手合いにや、あなたに限る。わしが出てみる。それこそ、ふくろ叩きに合ったかもしれんよ。今の連中は、どうやら、江東地区の出資者らしい」

日高は、葉巻きタバコをくわえ、多津の顔を見ながら、脂の染まった乱杭歯を見せた。

「あなた。のんきに構えてらっしゃるけど、見

通しはありますの？ 都内のあちこちで、預金者大会が開かれ、不穏な動きもあるというし、二階のお役人さんたちの調べも、いつもの検査と、ちがうようよ。第一陣は、どうやら、押しかえしたけど、気になるわ」

多津は天井へ顎をしゃくり、上目を使った。

二階の会議室で、都の経済局の係員数人が、帳簿を検査中だったので、それを気づかったのである。

「わしは、別に不正をやっとるわけじゃない。ただ、事業投資に、手を広げすぎたため、資金繰りが、わるくなっただけだ」

日高は、言いおわると、天井を睨んだ。

低い鼻から、タバコの煙をくゆらし、投げだした膝を重ね、なにかの対策を、考えているようだった。

多津は、まじろぎもせず、日高のポーズをみつめた。

——この男に、くつついているのが得策か。それとも、今のうちに、逃げだしたほうがいいか。日高に、金があるのかないのか。金があれば、多額の手切れ金をもらわねばならない。八年間も日高のために奉仕してきたのだから——

多津は、キャメルをくわえ、ライターの火を移しながら、そんなことを、考えだした。

日高万蔵は、丁県塩谷郡栗毛村、平家の落人伝説のある奥鬼怒の山村の出身である。今市の中学校を中退すると、万蔵の消息は絶たれた。終戦後満州から引きあげてきたとき、骨と皮ばかりに痩せ、落ちこんだ眼窩ばかりが、けもののように、光っていた。

万蔵の父は、狂死し、母は、狂人の父を捨てて出奔し、行方が知れず、生家の田畑も山も、他人の手に渡っていた。万蔵は、だれも相手にしてくれない、村人の態度を知ると、東京へ出た。

万蔵は、東京都文京区原町の高利貸し、大沼庄平を頼り、金融業の手伝いを始めた。大沼は、今市中学時代の、もっとも仲のよかった、同級生だったからである。

万蔵は、五年間、大沼の下で働き、小金をためると、独立して、電話担保の金融業を始めた。電話線回路の不足から、局番によっては、一本の電話が四十万円も五十万円もの相場を呼んだ時代で、彼は、数年たらずで億をこえる財を掴んだ。

電話の相場が安定してくると、彼は、結婚相談所を開設した。入会金千円、紹介見合料千円だったが、結婚成立の礼金は、相手しだいで、万以上の額をもらった。この相談所は、やがて二号の紹介から、一夜妻の紹介にまで発展し、おもしろいほど、金がもうかった。

鮎沢多津は、昭和二十九年の秋、万蔵の結婚相談所を訪れた女である。多津は、豊島区要

町の、かなり大きな酒屋の長女として生まれた。天性の美貌が、彼女の虚栄心を高め、商人やサラリーマンの妻をきらい、求めて、実業家の二号となった。

彼女は、新聞広告により、大日本観光株式会社、女子社員に応募し、秘書室勤務となった。六十を過ぎた好色の社長に近づき、待望の二号の座に納まった。が、三年たらずで、社長が脳溢血で急死すると、噂の高い結婚相談所を訪ねた。

「お金と地位のある、実業家を世話してほしいのですが」

という、多津の希望をかなえたのが、日高万蔵自身だったのである。

日高万蔵には、千代という妻があった。彼が、大沼の家に身を寄せたとき、女中をしていた女だった。万蔵は、栄養失調の体が回復すると、まず、女の体を求めた。同郷の農家の出である、

二十三歳の千代の体を求め、ずるずると同様してしまった。

一人の女兒を産むと、千代の体に、万蔵は興味を失った。万蔵の蓄財がふえるにしたがい、彼は、手あたりしだいに、女をこしらえた。彼の相手は、ことごとく、自分が雇っている女子従業員が取引相手の女子社員に限られていた。

「商売女は、結局、金が高くつくからな」

と、大沼にもらしたことがあったが、万蔵の狡猾さを、自認したものであらう。

多津は、当初、青山のアパートに住み、日高万蔵の二号としての生活をはじめた。多津が二十五歳、万蔵が四十一歳の秋である。多津はまもなく、本宅から千代を追いだし、千駄ヶ谷の屋敷へ乗りこんでしまった。千代は、女兒を連れ、T県八板の実家へ戻ってしまった。

昭和三十一年三月、日高万蔵は、一億数千万円の負債を背負いこみ、経営難においこまれて

いた、光和信用組合を引き継いだ。この負債を、一時に支払い、理事長に納まったのである。

日本経済は、戦後の混乱期から、安定期にはいると、どんな事業も、一獲千金的なあくどい利潤はなくなり、大資本にもとづく事業だけが、不動の収益を上げているようになった。

日高は、大資本を、みずから擲もうと決心した。大資本を集める道は、金融機関よりほかにはない。日高が、金融機関を擲むには、信用組合よりほかになかった。

光和信用組合の本店は、中央区千代橋三丁目にある、支店は、江東区、葛飾区、台東区、文京区、中野区の五カ所にあった。日高は、組合名を、太陽信用組合と変更すると、顧問として、東京地方区選出の参議院議員、河井健司、T県選出の衆議院議員、岡田忠義を迎えた。河井は、自治大臣をやったことがあり、岡田は憲民党の副総裁につながる人物だったからである。

鮎沢多津は、このころから、理事長日高万蔵の妻、日高多津と名のり、企画室長となって、組合の本店に乗りこんでいた。職員のだれもが、多津を正妻と信じていたが、もちろん、入籍しておらず、二号であることに変わりはない。

太陽信用組合は、日高万蔵の代となると、たちまち、息を吹きかえた。彼は、都下の一流大学から、アルバイト学生を集めると、「釣銭貯金」という標語のもとに、庶民の零細預金をかきあつめた。三百円、五百円という少額貯金が、またたく間に、大きな数字となって現われた。

日高は、預金高がふくれるに従い、観光事業の開発に乗りだした。企画室長鮎沢多津が、かつて大日本観光株式会社の秘書をしていた経験を生かし、アドバイスしたことも動機となったが、日高の計算からいっても、観光事業は、た

しかに魅力のある事業だった。

経済が安定し、世界戦争の危機も遠のくと、一大レジャーブームが訪れた。有産階級の独占だったゴルフが、大衆の中へ浸透して、商店の主人から、サラリーマンまで、ゴルフをやりだした。レジャーを求める観光バスは、ふえるいっぽうだし、風光にめぐまれた海岸山野は、人の群れで埋まるようになった。

日高は、鬼怒川沿岸の土地十萬坪を手に入れた、男体ゴルフクラブを作り、奥鬼怒の山野七十萬坪を買いいれ、大観光地の造成に乗りだした。代議士岡田忠義を会長に担ぎあげた、これらの事業は、成功を納め、順調な進展をしたが、急激な事業拡張から、資金面に無理があった。

信用組合は、中小企業等協同組合法にもとづき制定された、協同組合による金融事業に関する法律によって、設立されたものである。信用組合は、組合員の経済的利益をはかるため、奉